

1 小論文とは何かを知ろう

ZU1A10-11ZZ-01

1 はじめに

いまから小論文を学び始める人たちには、小論文って何からやればよいのかわからない、何を書いてよいのかわからない、大変そうだなあ、面倒だなあ……、といった思いを持っている人も多いと思います（そうでない人にはゴメンなさい）。確かに、文章を書くことは決して楽しいことではないし、他の教科と違って学習の手順も漠然として見えにくく、不安ばかりが膨らむ科目です。短期間で飛躍的に実力が伸びる、ということもなかなか期待できません。

でも、この講座を通じて少しずつでも着実に努力を積み重ねていくなら、必ず何かを得ることを保証します。それが何であるのかは、小論文という科目の特性上、君たち一人一人で異なります。もちろん志望大学合格は、誰にとってもその何かの一つになりますが。そして、単に合格にとどまらない成果が潜在していることを、最初に強調しておきます。君たちが手に入れるのは、自分を見る目であり、社会を見る目であり、自分自身の「可能性」の広がりなのです。

◆なぜ「小論文試験」なのか

では、そもそも小論文試験は何の目的で行われるのでしょうか。言い古されたことではありますが、それは、従来の教科試験の限界が明らかになったからにほかなりません。

学生の「思考力」「表現力」の低下はかなり以前から指摘されるようになったことであり、実際、大学の授業の中心をなすべき「ゼミ」が有効に機能しなかったり、レポートや論文への取り組み方のわからない学生が増加したりする事態に、大学の先生は頭を悩ませるようになりました。入試制度のせいだ、という批判はあちこちで聞かれますが、単に制度の問題ではありませんし、教師や大学など誰かのせいにすれば解決する類の問題ではありません。また、一概に教科試験が悪いとも言えません。実際、大学とは研究機関なのであり、その研究は高度に専門化し、日々進展していますから、大学で学ぶためには高校で各教科の学力をしっかりと養っておくことも不可欠です。しかし、競争の激化が受験勉強のマニュアル化を招いたことも確かでしょう。

こうした状況を打開するために、大学は入学試験にさまざまな工夫を凝らし、自分で考える力（マニュアル的ではない真の対応力）を見る試験によって、他者に自分の考えを的確に表現する力を持った学生を選ぶようになってきたのです。面接もその一つです。小論文がこれほど広まったのも、（最善とは言えなくとも）よい方法だと考えられているからでしょう。実際、小論文試験で合格した学生は、大学入学後も自主性がある、という評価も出てきているのです。それはやはり、先に示したように、小論文を通じて得た成果が生きてくるからではないでしょうか。

2 小論文とは何か

◆「作文」とどう違う？

小論文に初めて取り組む人がまず頭を悩ませるのは、「論理的に書け」「作文とは違う」という注文でしょう。「論理的ってどういうこと？」「作文とどこが違うの？」…。この疑問はもっともなもので、例えば国語の時間に「論理的な表現のための言葉づかいとは」といった教わり方をした人は、日本では少ないでしょう。

定義づけの違いは明示しにくいですが、「作文」は文章表現そのものの魅力、つまり印象的な表現や書き手の感性の豊かさを感じ取ることに、比重が置かれていると言ってよいでしょう。もちろん「小論文」でも文章表現は重要ですが、「作文」で効果を持つ比喩表現のような凝った言い回しは必要としません。

作文的なものの言い方を出発点にして考えてみましょう。小さな子どもの作文にもよく見られるタイプの文は、次のようなものです。

「僕は文章を書くのがきらいだ。」

確かに自分の思ったことを言葉に表した文ですが、そこに示される内容はまったくの個人的事柄に過ぎません。ただし、小さな子どもが主にこうした表現に偏るのは自然なことで、これは自分を客観的に見ることがまだできない（＝対象化できない）時期の特徴と考えられるようです。しかし、読み手に自分の感じたこと、考えたことを理解してもらう、納得してもらうためには、少なくとも「なぜきらいなのか」という根拠を示す必要があるでしょう。もっともこの例の場合、「面倒だから」などという根拠を示したところでやはり個人的事情に過ぎませんから、この内容で「論理的」に書くのはやや無理がありそうですね。では次のような文はどうでしょう。

「文章を書くのは難しいと思う。」

これなら自分の考えを読み手と共有する接点も見つけられそうです。例えば、

「文章を書くのは難しいと思う。なぜなら、頭に思い描いた内容を完全に言葉に置き換えることはできないからだ。」

これが根拠の示された文です。

論理的に書くとは、こうした論じる際の根拠、すなわち「論拠」の提示とともに自分の考えを述べるのが最大のポイントであり、小論文はこの「論拠」が不可欠である点で「作文」と大きく異なるのです。

◆論拠を示すためには

では、上の文章において、「なぜなら」以下の記述が導かれるためには何が必要でしょう。簡単に言ってしまうと、「どういう点に難しさがあるのか」という「問い」が先に存在しなければなりません。そして、その「問い」そのものを追究していくことが、「論理的に書く」こと、つまり小論文の鍵を握っているのです。「どこが難しいのか」という「問い」からさらに絞り込んでみると、

「文章を書くという作業とはどういうことか」

「それは自分の考えを言葉に置き換える作業だ」

「では言葉は自分の考えをそのまま映せるものなのだろうか」……

といったように進んでいくかもしれません。「論拠」を示した文章の背後には、こうした「問い」がさまざまに積み重ねられているのです。したがって、君たちが今後小論文を通して何かを考え、それを文章化する際にもっとも重要なのは、この「問い」をいか

に適切に導き出し、それをどれだけ自分のものとして追究できるかという点なのです。

当然ながら、小論文問題で与えられるようなさまざまな対象について自分から疑問を持つことができなければ、「問い」は生まれません。とりわけ、社会において「常識」とされていることや、自分でも「当たり前」と思っていることを疑ってみることが肝心です。ここではひとまず、**自分の考えたこと（書いたこと）を疑ってみよう**、とすすめておきます。自分自身を問い直すことの重要性は、この講義でもこれから随所に出てくることになるはずです。

3 小論文の形式・様式を知る

小論文が「自分の考え」を論理的に述べるものだという点を先に述べました。では、それを実際に解答の形にしていくなめには、どうしたらよいでしょう。ここでは、小論文を形にするための要点について概説することにします。

◆小論文の基本は「三要素」

先に、小論文には「論拠」が必要であり、そのためには「問い」が存在しなければならないことを確認しました。これに加えて、「答え」つまり「主張・見解」が必要であることは言うまでもありません。ということは、**小論文を構成するのは「問い」「答え」そして「論拠」の三要素だ**、ということになります。

「問い」は考察の出発点であり、論述の中心的内容（＝主題）を方向づけるものになります。自分で提示した「問い」に従って考察を進め、その小論文で証明しようとする中心的な問題点を引き出すことが必要です。この「問い」によって提示される考察対象を「論点」と言います。

たいていの場合、小論文問題（つまり設問文と課題文）が示す考察対象の範囲はある程度の広がりがあり、漠然としていることさえあります。「自然と人間」「自由とは何か」などといった設問の場合、特に考察範囲が広がります。800字、1000字といった限られた字数で考えを展開するには、対象が大きすぎるのです。したがって、設問文（および課題文）をもとに考えられるさまざまな問題提起を自分なりに挙げてみて吟味し、絞り込む作業が必要となってきます。そして、**小論文の制限字数の範囲で論述できる問題点は一つだけだ**と考えてよいでしょう。あれもこれもと問題点を取り上げても、それについて十分に論じる、つまり自分の考えとその根拠を十分に提示することは不可能だということを、しっかり意識しておいてください。

「答え」とは、問いに対して自分で提示する「主張・見解」のことです。そこでは、自分なりの価値判断・考えた結論が、読み手に対して明確に伝わるようにしなければなりません。読み手に遠慮するあまり遠回しな表現ばかりになったり、推測・推量としてしか「答え」を示さないのでは、自分の立てた「問い」から逃げたことになります（もちろん、必ずしも断定できない事柄も多く存在しますが）。

そうした結論にならないためにも重要なのが、「論拠」を考えるプロセスです。「考察」とは、この「論拠」を十分に練り上げていくプロセスと言ってよいでしょう。

「問い」＝これから自分が論じていく問題点を絞り込む

「答え」＝「問い」に関する自分の主張や見解

「論拠」＝自分の提示した主張や見解について、なぜそう言えるのかを説明する理由づけ

◆三要素を自在に構成する

この「問い」「答え」「論拠」の三要素を答案として構成するわけですが、実際の論述にあたっては、その構成順序はさまざまなバリエーションが考えられます。例えば、

〈問いの提示〉→〈論拠の提示〉→〈答え＝主張・見解の提示〉

という順序がオーソドックスでしょうが、「論拠」の提示では、具体例や課題文の読解などを通じた「考察」について、字数を費やして述べることになります。したがって、はじめのうちは、その論がどのような答えにたどり着くのか見通しが立ちにくくなります。そうした場合、次のような構成も考えられます。

〈問いの提示〉→〈主張・見解の提示〉→〈論拠の提示〉

この構成の利点は、読み手に論全体の主旨が伝わりやすいことと、書く側の君たちにとっても論の方向を確認しやすいことが挙げられます。ただ、字数が多くなるとかえって最後のまとまりに欠ける恐れも生じてきますので、

〈問いの提示〉→〈主張・見解の提示〉→〈論拠の提示〉→〈主張・見解の再確認〉

という四段階のプロセスで構成するとよいでしょう。こうなると、そのまま標準的な四段落構成にすることができるわけです。

中には 300 字、400 字といった短い字数で論述させるものも見られ、また「問い」が設問であらかじめ絞られている場合もあります。そうした場合は、

〈主張・見解の提示〉→〈論拠の提示〉

あるいは

〈論拠の提示〉→〈主張・見解の提示〉

というシンプルな構成がよいでしょう。

構成に関しては、こうしなければいけないと固く考えるのではなく、場合に応じて自分の発想と論述内容、強調したい部分などを、読み手に的確かつ自然に伝えられるように、柔軟に対応していくことを目指してください。

◆「構成がどこかへいってしまう……」——そんなときは

論理的構成が大切だとわかってはいても、実際に書き進めていくとどうしても話がそれていってしまう。最後になって、結論が問題の要求からそれていることに気づく。——こうした声もよく寄せられます。

簡単に言えば、それは「結論が見えないまま書き始めたから」にほかなりません。もちろん、結論とは考えを進めていくうちに出るものであって、先に存在するものではありません。したがって、十分に考えてから書き始める必要があるのは当然です。

そうはいってもなかなか思うようにいかないのが、「考える」という作業。そこで、

このような悩みを感じた人は、問いに対する「とりあえずの結論」をまず用意し、それにつながるように問題提起を工夫したり、具体例を選んだりする作業を行ってみましょう。この際、結論が浅いのでは、という心配が起こります（「心配ない」と思った人は、はじめから出直すべし！）。しかし、ひとまずは、自分が見定めた「とりあえずの結論」にのっとって、小論文全体を構成するのです。

これによって、「構成を見失う」ことは防げます。また、「問い」「結論」「論拠を示すための具体的考察」といったプロセスを自覚的に積むことによって、どの部分について考えが足りないか、はじめに用意した結論のどこに問題があるのか、といった点が自分自身で見えてくるのです。ここまで来たら、もう一度「結論」を練り直しましょう。深みのある「問い」が導かれて、小論文の充実度は飛躍的に高まっていきます。

結論を見据えた構成をあらかじめ考えてから書き始めること

4 「考えを伝える」ということ

◆見知らぬ他者へ伝える

「小論文」が基本的に「作文」と異なることは述べました。その違いから導かれる小論文のもっとも重要な性質は、「自分の考えを他者に伝え、理解してもらう」ということです。詩や随筆などの場合、その作品が自分の趣味・感性に合わなければ、内容を理解するなど到底できないとさえ思うことでしょうし、何とか理解しようとしても無理を感じるものです。そうした場合、読み手にとっては、自分なりの何らかの「解釈」は可能であっても「わかった」とは言えないのです。

しかし、小論文とは、読み手にそうした「解釈」を求めるようなものであってはならないのです。自分の考え（主張や見解）ができる限りの確に読み手に伝わることを目指さねばなりません。論理構成を明確にし、適切な表現も備わっていなければ、見知らぬ他者を説得することは難しくなってしまいます。

◆自分の体験は大切な出発点

「小論文では個人的な体験を書いてはいけない」、と思っている人がいます。その一方で、個人的な体験をただらだと書き連ねただけの内容も、特に小論文初学者の答案では頻繁に見受けられます。

そのどちらも誤りなのだとすることを、はっきり意識しておいてください。自分自身の体験について話をするのと、伝聞に基づいて話をするのでは、話の魅力も説得力もおおいに変わってきます。小論文においても、この点は同様です。問題になるのは、「わたしの体験」が、その小論文問題で考えるべき論点とどう関わってくるかという点です。また、その「わたしの体験」の中に他者と共有できる何かが含まれているのか、より広げて言えば、**人間一般の問題として共有できる何かが含まれているか**、ということが重要です。個人的な体験を書くことが、あくまでも個人的にしか意味を持たない場合、それは出題者や採点者と問題意識を共有することにはなりません。個人的な体験を通して示すことのできる「分析」や、君ならではの「視点」などが読み手に共有されるとき、それは非常に有効な論じ方となるのです。

小論文では、提示された一つの問題を出題者（採点者）と共有しつつも、君が論述する答案の内容は、出題者（採点者）にとって新たな発見となり、興味を引くことが求め

られます。ということは、読み手にとって未知の、君個人の体験をうまく盛り込めれば、それは大変すばらしいことなのです。

◆「……すべき」論の危険性

社会問題などを正面から取り上げた問題の場合、やってしまいがちなのが「○○すべきである」という主張のしかたです。もちろん、それ自体が「正しくない」ではありません。例えば「私たちはみな仲良くすべきである」という主張自体は、ごく正当なもので、文句のつけようもないように思えることでしょう。

「しかし」と、ここでいったん立ち止まって考えてみましょう。「仲良くすべき」であるのは確かなのだけれども、現実にはそう簡単に仲良くできないからこそ、この社会には数多くの問題が存在するのではないのでしょうか。まさに「言うは易し」です。したがって、800字もの字数を費やして結局「私たちは仲良くすべきだ」という以上の内容を何も示していない答案は、読み手にとって得るものがありません。空虚な、物足りない印象しか与えない答案では、到底合格点をもらえるはずがないのです。

◆「内容」か、それとも「表現」か

さて、ここまで読んできて、小論文では内容を優先すべきか、表現（文章力）を優先すべきか、という点で悩む人も出てきたかもしれません。結論から言えば、「両方重要」であることに変わりありませんし、合格できる答案とは、この両者のバランスが取れている答案にほかなりません。表現力（文章力）とは国語力に負うもので、正しい表記・表現で論述するためには、現代文の学習や読書を通じて言語感覚を養うことが重要です。内容の充実、それと並行して考えていくべきものであり、言葉を扱う能力が高まると考える力も向上するという相互作用もあるのです。したがって「内容」と「表現」のどちらが先ということはまったくないと考えてください。

5 基本的な約束ごとのあれこれ

本章の終わりとして、小論文を書く上での基本的な約束ごとのうちから、特に繰り返し確認してほしい事柄を簡単にまとめておきます。「当たり前じゃないか」と感じる項目も多いでしょうが、その「当たり前」がおろそかにされがちなのは、これまでの指導経験から明言できます。これからも、この講義はもちろん、解答解説でも繰り返し指摘することになりますが、しつこいと思わずに確認してください。ルールを知らなければゲームやスポーツに参加できないように、「入試」という決められた土俵に上がるためには不可欠な事柄ばかりなのですから。

形式面について

◆表記は正しく

誤字・脱字は「皆無」であることを目指しましょう。注意すれば直せるものですし、日頃から辞書で確認する習慣を持つことは国語力の向上にもつながります。小論文も学力をはかる試験の一つであることを忘れないでください。

◆記号（符号）をむやみに用いない

例えば「!」「?」「……」「——」など。絶対に用いてはいけないうわけではありませんが、そうしたニュアンス（強調・疑問・留保など）をあくまでも「言葉」で表現するよう努

めることが、論理的文章の基本です。君たちの答案でこうした記号が用いられているときは、気持ちばかりが先走ってしまったり、文章表現に凝り過ぎたり、という場合が多いようです。

◆段落分けを適切に行う

先に触れたように、小論文とは、「主張・見解」「論拠」といった複数の要素から成り立つものです。それを読み手に明確に表現するためにも段落分けは欠かせません。段落分けをしていない小論文は入試では採点の対象になりません。もっとも、200字、300字などと制限字数が少ない場合には例外もあります。

表現面について

◆文末表現を統一する

文末表現は「だ・である」調で統一するのが基本です。「です・ます」調を混ぜた答案が見受けられますが、これはいけません。「だ・である」調によって採点者に悪い印象を与えることを心配する人もいますが、そのようなことはまったくありません。

◆呼応を正しく

「私は…」と書き始めているのにそれに対応する述語がない文や、被修飾部がどこなのかかわからない修飾表現など、「呼応」がおかしな文も頻繁に見受けられます。言うまでもなく、どんなに長い「文章」もその基本は一つ一つの「文」なのですから、その文の構造がおかしくならないようにすることが重要です。

◆「思う」「であろう」「ではないか」といった表現の使い方に注意する

これも絶対にいけないということではありません。ただ、主張を明確にすべき文章であいまいさを残すことは、読み手への訴えかけも損なわれがちになりますし、何より「考える」ことからの逃げ道を作りやすい、ということは十分意識しておきましょう。その点を意識した使い方ができれば評価を下げることはありませんが、それには十分に訓練された文章力が必要となります。

◆極端に長い「文」を書かない

どの程度が「長い」かははっきり決められるものではありませんが、一つの文が200字にも及ぶような書き方は、読み手の理解を妨げることになり、悪文になりやすいものです。極端な場合は、一つの文＝一つの段落になっているものさえ見受けられますが、小論文とは読み手のための文章であることをくれぐれも忘れてはいけません。

さて、そこで……

「端正な、しかも問題に応える熱意と力を感じさせる文章」

これを目指して自分自身を磨いていきましょう。